

タイ北部、ユーミエン(ヤオ)の儀礼における女性と歌謡

Females and Songs in the Rituals of the Iu Mien (Yao) in Northern Thailand

吉野 晃

YOSHINO Akira

要 旨

タイ北部の山地民族ユーミエン (Iu Mien) 社会に新たな宗教現象が生じている。これまで移住生活を続けてきたユーミエンの定住化に伴って「初めての」固定的祭祀施設〈廟〉が複数の村落で建設されている。その〈廟〉における儀礼を司祭する者として女性シャマンが出現した。単に儀礼の場に参加するだけでなく、女性が儀礼司祭者となっているのは、従来のユーミエン社会には見られない現象である。この女性シャマンに神降する神は、〈盤王〉〈唐王〉以外は主に口承伝承で伝えられてきた神々であり、従来の儀礼の経文による祭祀対象の神とは異なる。女性シャマンは〈歌〉によって儀礼を司祭している。これは、従来の男性中心主義的な儀礼が男性祭司による読経ないし経文暗誦であったのとは大きく異なり、ジェンダーの壁を越えて女性シャマンが儀礼を司祭する道を開いた。ユーミエンの歌は日常会話で使う口語と異なる文語を用い、歌唱法も複雑である。その歌唱法のうちのコン・ヅウンが、女性シャマンが多く用いている歌唱法であった。女性シャマンが司祭する儀礼は、個別クライアントの需要に応じた治療儀礼、厄祓い儀礼、開運儀礼がもっぱらである。これらの〈廟〉の建設、女性シャマンの登場、口承伝承による祭神、歌による儀礼司祭といった特徴は、従来の儀礼には見られなかった特徴であり、その点で従来の男性中心主義的な儀礼群と補足的関係にある。

【キーワード】 ユーミエン、ヤオ、女性シャマン、歌、廟

1. ユーミエン

ユーミエンはミエン語を話し、ミエン (Mien⁽¹⁾) あるいはユーミエン (Iu Mien) を自称する人々である。彼らは中国南部と東南アジア大陸北部の山地に分布する民族である。分布域は、中国の広東、湖南、広西、雲南の各省、ベトナム北部、ラオス北部、タイ北部の広範囲に亘る。これは、彼らが携わってきた焼畑耕作に伴うものである。タイ、ラオスのユーミエンは近年まで盛んに焼畑耕作を行ってきた。中国ではヤオ族に含まれ、その最大部分を占める。ベトナムではザオ、タイではヤオと他称されてきた。彼らは移動の途上で、漢族と強い関係を保ち、漢族文化を多く受容

してきた。漢字の使用や道教的色彩の強い儀礼群にそうした漢族文化の影響が見られる。

タイには5万人弱のユーミエンがいる(2002年時点で45,571人 [Krom Phatthana:sangkhom lae' Sawatdika:n 2002:18])。現在のタイ王国の領域へユーミエンが移動してきたのは19世紀後半と推定されている。やはり焼畑耕作に伴う移動によってタイへ到った。タイにおいても、移動はしばしば行われた。こうした移動生活はユーミエンの様々な社会文化制度の基盤となってきた。移動を前提とした行動様式が人々の生活を支えてきたのである。

しかし、他の国と同様に、タイにおいても焼畑耕作に対する圧力は増加している。無知に基づく「焼畑は森林破壊だ」という謬見により、焼畑耕作に対する禁止圧力は従来強かった。さらに、1989年に森林伐採禁止令が施行され、商業目的の樹木の伐採が禁止された。これは結果として焼畑耕作を絞殺することになった。ユーミエンの行ってきた焼畑耕作は森林伐開を前提とした焼畑耕作であったからである。こうした諸事情の故に、焼畑耕作を行ってきたタイの山地民族の多くは定住化を余儀なくされている。ユーミエンもまた焼畑耕作から常畑耕作へ移行せざるを得ず、同時に定住化も進んでいる。かつて移動生活を送ってきた人々が定住化する。それに伴う一つの現象として、今回紹介する廟における儀礼は、そうした移住生活を送ってきた人たちの定住化に伴う新たな行動である。

2. 新しい宗教現象—廟の建設—

廟は、後に述べる女性シャマンの活動の場でもある。従来のユーミエンの儀礼は個人宅で行われるのが原則であった。これは、焼畑耕作に伴う移動が常であったためである。村落は移動してゆく世帯の住居の一時的な集合に過ぎなかった。したがって、廟のような固定的祭祀施設は作られようもなかったのである。しかし、定住化が進むと、村落のメンバーが固定的となり、そうした施設を設置することも、また維持する組織を作ることも可能となる。

定住化に伴って、〈廟〉*miu* を作る動きが2000年代以降、ユーミエン村落で顕れてきた。筆者が主に調査を行っているのは、チエンラーイ (Chiang Rai) 県ムアン郡のHCP村である。ここに〈廟〉が建てられており、多くの信者を集めている。HCP村に〈廟〉が作られる以前に、チエンラーイ県ドーイルアン郡のHCL村において〈盤王〉*Pienhung* (〈盤皇〉とも書く。詳細は後述) を祀る〈廟〉が作られた。モンコンによると、この村は、1990年代後半には経済不振、覚醒剤使用、村内不和などの問題を抱えていたが、2000年初めにHCL村の70歳の老翁がトランスに入り述べた託宣をきっかけとして〈盤王廟〉を作ることとなった。[Mongkhhol 2006:262-263]。〈廟〉は2000年に完成し、2001年に開眼儀礼が行われ、その後3年間続けて開眼儀礼が執り行われた[Mongkhhol 2006:263]。筆者も2003年に開眼儀礼の一部を実見した。2013年時点では、陰暦の毎月初一日と十五日に儀礼を行っている。祀ってある像は、〈盤王〉と〈唐王〉の椅座像、〈七姐〉とユーミエン〈十二姓〉の始祖たちの木版レリーフ像である。

HCP村においては2004年に「ユーミエン文化センター」(Su:n Watthanatham Iu Mian 〈タイ語〉) と称して、木竹造りの平屋建ての建物を建てた。これが〈廟〉となる。場所は、村の上方の尾根端に位置し、陸軍の特別部隊の駐屯地に隣接している。ここはタイ語でDoaygoe:n (「銀の山」の意味) という。

2009年陰暦八月十五日に最初の神降⁽²⁾があった。女性1名と男性2名の3人に〈盤王〉の霊が降り、託宣を述べた。そのときは、まだ文化センターには神像はなかった。主祭神の〈盤王〉の像が設置されたのは、翌2010年であった。そのときには〈盤王〉ほか5体の神像が設置された。

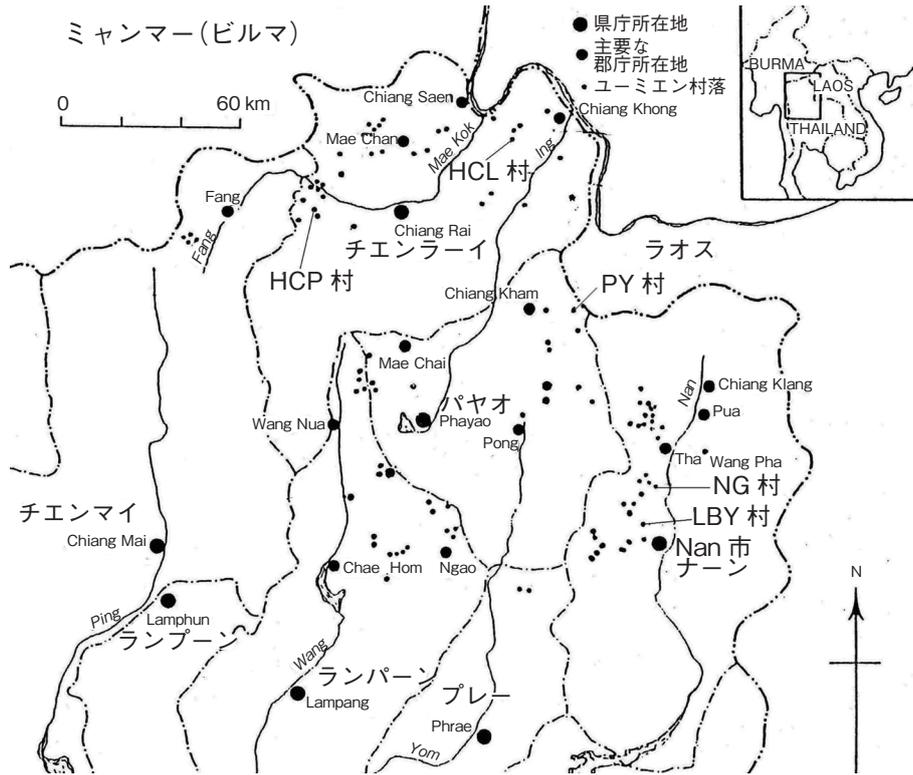


図1 タイ北部

2011年にはさらにいくつかの像が設置された。

2012年の陰暦正月に、隣にあった集会所に神像を移し、そこを新たな〈廟〉とした。このとき、〈盤王〉の像を新たに造った（写真1）。古い〈廟〉は同年3月に取り壊した。その跡地には、コンクリート造りの正式の〈廟〉を建設している。2012年5月19日に最初の柱を立てる儀礼（起工式）が行われた。2013年8月現在、土台と柱の上に屋根が葺かれているが、壁はまだ作られていない。完成にはあと1～2年かかるであろうとのことであった。2012年正月初一日から現在の〈廟〉でのシャマン儀礼が行われている。月次の儀礼は、陰暦の毎月初一日と十五日に〈拜盤王〉*Paai Pienhung* 儀礼として行われている。正月は初一日から初三日の3日間に亘る。七月十四日はユーミエンにとって〈過十四〉といい、祖先祭祀が行われる重要な日であるので、この日にも儀礼が行われ、翌七月十五日にも月次の儀礼が行われる。

このような〈廟〉を作る動きは、他のユーミエン村落でも見られる。ナーン（Nan）県ムアン郡NG村では「ユーミエン文化センター」を2008年に起工して2010年2月14日（陰暦正月初一日）に完成し、この日に最初の祭祀を行った。落成直後には神像や礼拝対象となるものはまだなかった。やむなく、「盤皇聖帝 衙前 投進」と書いた紅紙を貼り、祭祀を行った。その後、ナーン市街にある漢人の廟の写真とHCL村の〈廟〉に祀ってある神像（写真2）の写真とを合成加工した画像をプリントした幕を正面に掲げた。この画像幕はそのままであるが、2013年に「盤皇靈位」



写真1 HCP村の新しい〈廟〉の祭神（2012年1月）



写真2 HCL村の〈廟〉の祭神(2013年5月)



写真3 NG村の〈廟〉内部(2013年6月)
「盤皇靈位」の牌が祀ってある

(実物は中国簡体字)とプリントした小幕を画像幕の前に置いた(写真3)。いわば「位牌」である。この〈廟〉では、シャマン儀礼でなく、男性祭司による伝統的な形式の儀礼を陰暦正月初一日、七月十四日に行っている。また、陰暦の毎月初一日、十五日に村人が随意に焼香しているが、特に儀礼は行っていない。

同じナーン県ムアン郡の別の村(LBY村)にも〈廟〉を作る計画があり、2011年に訪ねたときには用地の選定中であった。もっとも、2013年6月にNG村で聞いた噂話では、計画が頓挫したともいう。この他にも、チエンラーイ県のユーミエン村落でも廟を作る動きがあると聞く。このように、〈廟〉を作る動きは、HCL村やHCP村だけでなく、他の村にも徐々に広がっている。それには、HCL村やHCP村の〈廟〉の存在が大きく影響していることは言うまでもない。しかし、HCL村とHCP村が位置するチエンラーイ県だけでなく、むしろ新しい動きは遠く離れたナーン県において見られる点に注意したい。単に近隣の村で〈廟〉を作ったことに影響を受けたというレベルではなく、〈廟〉を建てるのがユーミエン

の行動として、同じユーミエンによって把握され、再生産されているのである。

3. 女性シャマンの登場—廟における儀礼—

1) 従来^の儀礼

従来の儀礼は男性中心主義であった。儀礼を主催するのも、儀礼の執行を司る祭司も、儀礼の後の直会^{なおり}に出席するのもすべて男性が前面に出ていた。女性は儀礼には直接関わらない存在であったのである。また、儀礼で読誦する経文は漢字で書かれている。漢字を学ぶのも従来は男性だけであった。漢字の経文を読誦する際に、儀礼によってはミエン語ではなく、ツィア・ワー〈謝話〉*tsie waa*という「広東語」で読まなくてはならないが、それを習得しているのも男性に限られていた。さらに、祭司による儀礼でなく、降神を伴うプットン〈発童〉*put tong*というシャマン儀礼も男性がシャマンとなる。

ユーミエンの儀礼体系は、実は様々な宗教運動の影響があったと思われる。道教の正一派と同じ〈三清〉*faam tshing*(元始天尊、靈宝天尊、道德天尊)を祀る儀礼のセットがある一方で、そうした〈三清〉に関わらない儀礼のセットもある。これまで、タイ北部において観察あるいは伝聞した儀礼を表1に挙げた。この表中で、〈三清〉に関わるのは、2~4の儀礼である。道教の神々を描いた掛軸のような画〈大堂画〉*Tom toang faang*を十数枚壁に掛け、その神々を勧請して祀る。しかし1〈歌堂〉は、そうした画を用いない。B列の儀礼は、〈三清〉とは異なる〈玉帝〉という神に

表1 タイにおけるユーミエンの儀礼

| | A 〈大堂画〉 <i>tom toang faang</i> を掛け、高位の神霊を招請する。 | B 中空〈半天高樓〉に住む〈玉帝〉 <i>Nyuttai</i> へ向けた祈願を行う（〈當天〉 <i>toang tin</i> または〈叫天〉 <i>heu lung</i> ）。 | C AとBのいずれもなし。 |
|------------------|--|---|---|
| 1 〈盤皇〉祭祀 | | | 〈歌堂〉 ユーミエンの祖先を救護した〈盤皇〉を祀る謝恩儀礼。姓の下位分節ごとに儀礼場のしつらえ、供物などが異なる。 |
| 2 功德造成 〈修道〉 | 〈掛燈〉 〈度戒〉 〈加職〉 〈加太〉 | | 道教の道士叙任儀礼の形式をとっており、受礼者には、到達した儀礼的位階に応じた儀礼名（〈掛燈〉の場合は〈法名〉 <i>faat bua</i> ）と、霊界の守護兵（〈陰兵〉 <i>yin-paeng</i> ）が与えられる。〈掛燈〉はミエン男子が通過すべき成人式で、民族アイデンティティをも規定する。 |
| 3 祖先祭祀 | 〈超度〉 | 〈當天安墳〉* 〈析解〉 [〈掛燈〉 〈超度〉 〈做身〉の儀礼分節として行われることが多い] 〈安翁太牌〉 | 〈尚翁太〉 〈尚家先〉 〈尚衆鬼〉 〈尚外祖鬼〉 〈尚外家鬼〉 〈収兵〉* 〈平安墳〉 〈招地獄〉 |
| | <p>〈超度〉：二日二晩ないし三日三晩。比較的若い世代の〈家先〉を供養し、冥界での安泰を祈願する。この儀礼を3回行くと、死者は祖先=〈翁太〉 <i>ong-thai</i> となることができる。</p> <p>〈析解〉：祖先を害する靈神を祓う。</p> <p>〈安翁太牌〉：祖先の祭壇を家に設置する儀礼。</p> <p>〈尚翁太〉：酒盞・水盃・線香・紙銭を供え、鶏1羽を供犠する。1～2代目くらいまでの比較的若い世代の〈家先〉を供養する儀礼。</p> <p>〈尚家先〉：4～5代以上上輩の祖先を祀る。</p> <p>〈尚衆鬼〉：全ての家先を祀る。</p> <p>〈尚外祖鬼〉：家主の母方の祖先を祀る。</p> <p>〈尚外家鬼〉：家主の妻の祖先を祀る。</p> <p>〈収兵〉*：祖先をあの世で苦しめている悪鬼を駆除する。</p> <p>〈平安墳〉：祖先の墓のレプリカを清掃して墓を清める。〈発童〉を伴わない。</p> <p>〈當天安墳〉*：〈発童〉を伴う安墳。</p> <p>〈招地獄〉：地獄にいる祖先を救い出す。</p> | | |
| 4 人生儀礼 | 〈做身〉 [葬儀] | | 〈添人口〉 〈斥人口〉 〈出花林〉 〈做親家〉 [婚礼] 〈添人口〉：出生、養取、入婚など、ピャオ（家）の新しいメンバーを〈家先〉に紹介し、その内の一人の〈家先〉に新しいメンバーを登録し、守護祖先とする。 |
| 5 収魂 [生者の魂を呼び戻す] | | 〈當天架橋〉 | 〈架平橋〉 [多種] 〈叫魂〉 〈贖魂〉 〈贖花〉 〈搶魂〉* 収魂儀礼：離脱した〈魂〉を本人の身体に呼び戻す儀礼。人間の身体各部分に離脱可能な〈魂〉 <i>uon</i> がある。総数10又は12（インフォーマントにより異なる）。〈魂〉が身体を離れる→身体の当該部位の不調→この遊離した〈魂〉を身体へ戻す。 |
| 6 穀霊祭祀 | | 〈入春〉 | 〈招稻魂〉 〈贖稻魂〉 穀物の霊を呼び戻し、豊作を祈願する。 |
| 7 土地霊祭祀 | | | 〈設地方鬼〉 〈設地鬼〉 〈給秋〉 〈開山〉 土地の霊を祀り、安全を祈願する。あるいは耕地の霊を祀り、豊作を祈願する。 |
| 8 厄祓い | | | 〈解煞〉 個人の身の上に掛かっている悪い作用〈煞〉を解除する。 |
| 9 願掛け・返礼 | | | 〈許願〉 [多種] 〈還願〉 [多種] 〈賀年〉* 家内安全や豊作を願掛けする。 |
| 10 謝罪 | | | 〈釋師父〉 〈釋天地〉 〈釋契父〉 何らかの霊に対して侵犯したために起こった不幸を、謝罪によって解除する。 |
| 11 その他 | | | 〈設太陽月亮〉 〈設元肖鬼〉 〈奏星〉 〈設百家姓〉 心身の不調を解消する儀礼。あるいは不調が生じぬよう予防措置をとる儀礼。 |

註：* = 〈発童〉を伴う儀礼

対する祈願儀礼である。C列の儀礼は様々な祖先祭祀儀礼、治療儀礼、厄祓い儀礼などである。こうした儀礼の種別に応じて、祭司もランク付けされる。C列の儀礼を司祭できる者をシップミエン・ミエン（〈設鬼人〉 *sip mien mien*）、B列の儀礼まで司祭できる者をツォウサイトン・ミエン（〈做師小人〉 *tsou sai toan mien*）、A列の儀礼も司祭できる者をツォウトムサイ・ミエン（〈做大師人〉 *tsou tom sai mien*）という。それぞれの儀礼に漢字で書かれた経文がある。C列の儀礼は短く、大方の祭司は経文を暗誦しているが、A列とB列の儀礼は長く、経文を読誦することになる。

こうした公になる多数の儀礼とは別に、きわめて個人なレベルで、降神して占いや失せ物当てをするような宗教職能者の存在は、筆者も見聞していた。ただ、タイで筆者が見聞した限りではこうした宗教職能者は、あまり表に出ず、個人的な相談事に応じていただけであった。一般の儀礼は個人宅で行われるとはいえ、大規模なものとなると見物人も来るような、公に開かれたものである。プットンを行う儀礼は新年に催され、シヨウペーン〈収兵〉 *syau paeng* というが、このシヨウペーンは多くの見物人を集める。しかし、ここで述べている降神する宗教職能者に対する相談事は小規模で、屋内でひっそりで行われる。このような見者（*seer*）のような宗教職能を有する者の存在は、中国湖南省藍山県で調査したときにも聴取した。聞いた話では、そのような能力を有する者には女性もいるとのことであった。タイでも、筆者が見たのは男性の降神者であったが、女性もいるという情報は聞いていた。このように、女性で降神する者の存在は皆無ではなかったが、決して目立つ存在ではなかった。

2) 女性シャマンの登場

前節で述べたように、女性の降神者は皆無ではなかったが、ユーミエンの儀礼においては顕著な存在ではなかった。しかし、2013年1月時点で26名の女性シャマンが、1箇所の廟で活動しており、非常に顕著な存在となっている（この他、降神する男性祭祀者も5名いる）。この点で、従来の宗教職能者を巡る光景は一変した。もっとも、それはHCP村の廟とHCL村の廟においてのみ見られる現象ではあるが、女性が儀礼の場において前面に出てきたのは、筆者にとっても新たな経験であった。先に〈廟〉ができたHCL村でも、2名の女性シャマンが降神儀礼を行っている。また、先に〈廟〉建設の計画があると述べたナン県のLBY村においては、1名の女性シャマンが不定期に自宅の2階でセアンスを行っている。2013年秋の時点で女性シャマンの存在を確認できるのは上記の3箇所であるが、これまでの男性中心主義的な儀礼執行体制に女性が参与する風穴が空いたのである。

3) 降りてくる神々

神降ろしをミエン語でピアッイエム *pieq-yiem* という。漢字で書けば〈入陰〉である。神降ろしをするシャマンをピアッイエム・ミエン *pieq-yiem-mien* という。このピアッイエム・ミエンがシャマンということになる。先に述べたプットンとの違いは、降りてくる神の格の違いである。いずれも変性意識状態に入り、神・精霊（ミエン語ではいずれもミエン *mien*）が降りてくる点では同じであるが、ピアッイエムは、「上天にいる神」 *ku'ngwaai lung nyei mien* が降りるのに対し、プットンで降りてくるのは祖先と同じ〈揚州洞〉 *yaang-tyou tong* というところにいる〈引童翁〉 *yien toang ong* という格が低い精霊である。〈揚州洞〉は「上天の神」の居場所よりもより低いところにある。また、プットンで降りてきた〈引童翁〉は言葉ではなくチャーオ〈箒〉 *caau* というト占具でその意志を示すのに対し、ピアッイエムの場合は降りてきた神が歌などの言葉で託宣を述べる点も異なる。

HCP 村の〈廟〉における祭祀でシャマン達に降りてくるのは、下記のような神々である。

(1) 〈盤王〉 *Pienhung* (〈盤皇〉とも書く) とその妻、〈唐王〉 *Toang-hung* とその妻

ユーミエンは〈十二姓瑤人〉 *Tsiep nyei fing Iu Mien* というが、この〈十二姓〉の祖先が海を渡ったときに救護したのが〈盤王〉と〈唐王〉であった。タイ北部のユーミエンに広く伝わる渡海神話 = 〈漂遙過海〉 *Piiuu kiekoi* 神話の概略は以下の通りである。

ユーミエンの祖先が南京にいたとき、2年続く干魃に遭い、船に乗って逃げた。海を渡る途上嵐に遭い、難破しそうになったが、祈願して〈盤王〉〈唐王〉〈五旗兵馬〉といった神々に助けられ、広東に上陸して感謝の儀礼を行った。その後分散して移住していったが、〈盤王〉に対する謝恩儀礼は世代を継いで続けられている。

〈盤王〉への謝恩儀礼は〈歌堂〉 *dzoudaang* という。〈歌堂〉は、タイ北部でも行われている。毎年行う儀礼ではないが、数年から十年前後の間隔を置いて、重要な儀礼と併修される。通常の〈歌堂〉儀礼では、神像は祀らない。また、〈歌堂〉では〈盤王〉を讃えた〈盤王大歌〉などの歌を唱う。〈盤王〉と〈唐王〉は HCL 村でも対になって祀られており、ユーミエンのアイデンティティに関わる重要な神である。この他、〈盤王〉の従者たる〈將軍〉 *Tshiangjun* がいる。廟では、〈盤王〉の〈將軍〉が2体、〈唐王〉の將軍が1体祀られていた。〈將軍〉も神降することがある。

(2) 〈七姐〉 *Tshiet tsie* (あるいは〈七妹〉 *Sie muo*)

七人姉妹の神々であり、場合によっては、年上の3人を〈三姐〉 *Faam tsie*、年下の4人を〈四姐〉 *Fei tsie* と分けて言及することもある。HCP 村では〈盤王〉の娘たちであるとも、〈唐王〉の娘たちであるとも言われている。他の村では〈玉帝〉の娘という伝承も聞かれた。HCP 村の廟では、7人を描いた木板が祀られていた。女性のシャマンには、この〈七姐〉がしばしば神降する。

(3) 〈老君〉 *Lukuon*

〈老君〉は、ユーミエンに〈三清〉 *faam tshing* の法を教えた神である。〈三清〉は、表1のA列で用いる〈大堂画〉に描かれている首座の三位の神 (〈元始天尊〉〈靈宝天尊〉〈道德天尊〉) の総称である。翻って道教的な儀礼体系を「三清の法」と言っている。〈老君〉も、ユーミエンのアイデンティティに関わる点がある。「ヤオ」と他称される人々の中には、ユーミエン以外の集団も含まれることがある。ラオスでは、Kim mun を自称とし、「ランテン・ヤオ」と他称される人々があり、ユーミエンと同様に道教的な儀礼を伝えてきているが、そうした人々との対照で、ミエンは「我々は老君の人」とあると言う。

(4) 〈伏羲姉妹〉 *Fuhei tsei-mei* と〈郎老〉 *Longloa*

〈伏羲姉妹〉は男女一対だという。天下に大洪水が起きて兄と妹のみが残り、その2人が現在の人類の祖となったという洪水-兄妹婚神話 (「伏羲女媧」神話) と同様の神話がユーミエンの許にも伝わっている。それに基づく神である。〈郎老〉は、洪水後の〈伏羲姉妹〉に夫婦になるよう諭した神であるという。廟には小さな像があるが、2人とも女装である。

(5) 〈観音父母〉 *Tsiem yem puo mou*

〈観音父母〉は女性神であるという。ユーミエンに、言語や男女の区別、民族ごとの衣装の区別など、世の中の様々な区別を教えた神であると言われている。廟には以前は立像が祀られていたが、現在は画像のみ祀っており、立像は同じ敷地内にある仏堂に移された。

(6) その他

以上述べた神々の多くは〈半天高樓〉 *Pienthin khulau* というところにいるという。これは表1の

B列の儀礼の対象となる〈玉帝〉*Nyuttai*の住むところでもある。高位ではあるが比較的身近な神が〈半天高樓〉に住んでいると位置づけられよう。〈太陰先生〉*Thaai yem fin-saeng*、〈太陽先生〉*Thaai yaang fin-saeng*、〈太白先生〉*Thaai paeq fin-saeng*という神もこの〈半天高樓〉にいるという。この三位の神は、その名から、月、太陽、金星の神格化したものと解せるが、詳細についてはまだ聞き取りできていない。少なくとも、男性神であり、〈盤王〉と人間を取り次ぐ役目を果たしているようである。〈太陰先生〉と〈太陽先生〉の像はHCP村の廟にはない。〈太白先生〉は、〈伏羲姉妹〉の2体の間にいる神像がそれであるという。〈太白先生〉は、神降する神としてしばしば言及される。

また、廟の関係者によると、廟で祀っている神には、他に〈留參姉妹〉*Liu faam tsei mei*がいる。〈留參姉妹〉は〈劉三姉妹〉の宛字であろう。この神の像はHCP村の廟にはないが、この廟で祀っていると〈廟〉関係者は言う。

〈廟〉の管理人の言では、男性シャマンには男性の神が、女性シャマンには女性の神が降りるといふ。しかし、実際に女性シャマンに話を聞いてみると、女性シャマンに男性の神（〈盤王〉〈唐王〉〈老君〉〈郎老〉〈將軍〉など）が降りたこともある。確かに、女性シャマンには〈七姐〉が降りたとされることが多く、男性シャマンに降りる神として言及されるのも多くは男性神であるが、シャマンと神とのジェンダー区分はさほど単純ではない。男性シャマンに女性神が降りた事例はまだ聞いていないが、これはインフォーマントの圧倒的多数が女性シャマンであることによるかもしれない。

上記の神々は、〈盤王〉と〈唐王〉を除くと、通常は経文に出てこない神である。すなわち、男性祭司が用いる経文に出てくる神ではなく、専ら口承伝承で伝えられた神であることに特徴がある。従来の男性中心的な儀礼では、〈大堂画〉に書かれた〈元始天尊〉〈靈宝天尊〉〈道德天尊〉〈聖主〉〈玉皇〉〈大尉〉〈海嶺〉などの神々か、あるいは表1のB列で祀られる〈玉帝〉といった経文にその名が登場する神々が祭祀対象となる。逆に、女性シャマンに神降する神々は、少なくとも表1に示した儀礼で用いる経文には現れない神々であり、従来の儀礼と祭神の面でも競合することがない。

〈盤王〉と〈唐王〉は従来の儀礼と女性シャマンの儀礼との両方で祭神となっている。しかしその扱いは対照的である。従来の儀礼においては、表1の1〈盤皇〉祭祀儀礼の〈歌堂〉が〈盤王〉と〈唐王〉を祀る儀礼であるが、儀礼には神の像は一切用いられない。祭壇には切り紙が正面に飾られるだけである。この点で〈大堂画〉を用いる表1のA列の儀礼とも異なり、〈盤王〉〈唐王〉ともに可視的ではない。一方、新しい儀礼では、HCP村でもHCL村でも〈廟〉に〈盤王〉と〈唐王〉の立像が設置され、祭祀対象となっている。可視性という点において、両者は大きく異なっている。

4) 〈廟〉における儀礼

筆者はHCP村における〈拜盤王〉儀礼を数回観察した。2011年6月2日（陰暦五月初一日）、2011年9月12日（八月十五日）、2012年1月23日（正月初一日）、2012年6月19日（五月初一日）、2012年8月17日（七月初一日）、2013年2月10日～12日（正月初一日～初三日）、2013年5月24日（四月十五日）、2013年8月20日～21日（七月十四日～十五日）の8回である。

観察したところ、形式的な集合儀礼は午前9時ころの開始時と夕方の終了時に行われるだけである。その他は全て、個々のクライアントの相談事に応じた個々の儀礼が行われる。もう少し詳しく言えば、祭祀者はシャマンあるいはシャマン祭司としてクライアントの相談や対処儀礼の要請に応じるのである。個々のクライアントは、身心の不調や家族内の問題など個人的な問題の解決を求

めにやってくる。一人一人の祭祀者（女性が多いが、男性もいる）は、その要請に応じて、相談事には託宣など、具体的な問題には、治療儀礼や厄払いの儀礼などを行って対処している。また、クライアントの依頼によって、複数のシャマンが参与する集合儀礼が行われることがある。さらに、クライアントの相談とは関係なく、神降したシャマンが独自に託宣を述べることも起こる。

儀礼開始時の集合儀礼は、2011年6月のときには、皆で拝礼する形だけであったが、後に、各神へ歌を唱いながら茶を献ずる形へ変わった。また、終了儀礼も、2011年時点では、個々の相談儀礼でクライアントが寄進した礼金をまとめて神に捧げる儀礼があったが、2013年には見られなかった。調査の度に集合儀礼の形式は少しずつ変化しており、まだ定型が固まっていないと見られる。

5) 儀礼におけるパフォーマンス

こうした個人的相談事に対処する女性シャマンの儀礼の形式には2類型あり、また儀礼パフォーマンスにも2類型ある。儀礼の形式としては、祭祀者がシャマンとして降神し、降りてきた神が直接クライアントに対処する形と、神降した状態で儀礼を司祭する形とがある。前者の場合、歌で託宣をすることもあれば、節を付けずに託宣を述べることもある。後者の場合、いわゆるシャマン祭司（shaman-priest）となり、儀礼を行う。その場合、ある神がシャマンに降りて他の神に対して儀礼を行うこともあり、神がシャマンに儀礼のやり方を指示し、シャマンがそれに従って祭司として儀礼を行うこともある。

シャマン祭司として儀礼を行う場合のパフォーマンスの類型としては、トランスに入る点では同じであるが、歌を唱って儀礼を進行するタイプと、無言で儀礼的所作のみ行うタイプに分かれる。これらは、降りてきた神が歌を唱えるか否かによるものだと、ユーミエンの人々は言う。

託宣や儀礼執行において唱われる歌については、後の章で詳述する。無言で儀礼を司祭するタイプのシャマン祭司は、〈釵〉*kim* という儀礼用のナイフを振って儀礼を進行する（写真4）。〈釵〉は通常の儀礼で、たとえば水を浄めて聖水を作るときに、筆を持つように〈釵〉を持ち、水碗に向かって〈釵〉で中空を突く所作を行い、水を浄める。そうした中空を〈釵〉で突く所作は、通常の儀礼の中で、超自然的な力を対象物に付与するときに頻用される。その所作を、女性シャマン祭司の儀礼でも多用しているのである。

いずれの場合でも、神が降りてきているときには、身体の震えなどが見られる。これは個人差が大きく、ジャンプやひきつけのような大きな身振りを示す場合もあるが、一方で、脚や手のわずかな震えだけを見せる場合もある。また、女性シャマンが自分の降神の映像を見て脚の震えを降神の徴として指摘しており、こうした身体の震えが神降時の身体的特徴として本人にも意識されていることが分かる。

降神した女性シャマンによる儀礼の多くは治療儀礼と厄払い儀礼、強化儀礼である。すなわち表1で言えばC列の儀礼に相当する。治療儀礼と厄払い儀礼は、歌を唱わないシャマン祭司のタイプの場合、表1C列の儀礼を、歌唱司祭の形式で執り行う。歌を唱うシャマンの場合は、治療儀礼では患部に触れたり、マッサージしたりして、直接的に患部に働きかける所作で儀礼を進行することが多い。聖水などを与えることもある。厄払い儀礼では、歌を唱って儀



写真4 治療儀礼を行う女性シャマン（HCP村、2012年1月）
無言で〈釵〉を振って儀礼を司祭している。



写真5 ヘウ・ウアン・ドー・スイ (HCP村、2013年6月) 〈魂〉を呼び戻し、手首に糸を巻く。



写真6 背中に捺された〈老君印〉(HCP村、2013年2月)

礼を司祭する。

強化儀礼では、次のような儀礼がしばしば行われている。一つはヘウ・ウアン (〈叫魂〉 *heu uon*) である。生者の魂を呼び身体に固定する儀礼であり、従来の形式でもしばしば行われている儀礼である。ユーミエンの靈魂観では、人間には3つの〈魂〉 *uon* と7つの〈魄〉 *baeq* があり、身体の各所にいるが、それが抜け落ちると、身体の不調を生じる。その〈魂〉を呼び戻し、身体に固定する儀礼である。実際に何か身体の不調がなくても、旅立ちなどのときにはヘウ・ウアンを予防儀礼として行い、当人を強化する。ヘウ・ウアンの時には糸を手首に巻く。それをドー・スイ *do sui* という。このヘウ・ウアン・ドー・スイが月次の儀礼では最も多く行われている (写真5)。

また、これはHCP村の〈廟〉だけで見られるものであるが、〈老君〉の印を身体に捺す儀礼が行われる (写真6)。これによって、本人の身心の強化を図る。印は直径15cm くらいの丸い木製の印である。普通〈老君印〉 *lukuon yien* というのはおおよそ3×4cm 四方の四角い印で、儀礼文書などに捺すが、それとは異なっている。この大きな印を服の上から背中などに捺してもらうのである。そのときにも女性シャマンは歌を唱って儀礼を進行している。

先にも述べたように、こうした治療儀礼や厄祓い儀礼、強化儀礼を受けるために多くのクライアントが月次の〈拜盤王〉儀礼にやってくる。それに対応する女性シャマンも多いため、〈拜盤王〉の場はセانس大会の様相を呈するのである。クライアントは他村からも多く来ている。さらに、3名ほどであるが、要請を受けて村外へ出かけ、シャマン祭司儀礼を行う者もいる。結構需要があ

表2 従来の儀礼と〈廟〉における儀礼

| | 祭司が執行する従来の儀礼 | HCP村の〈廟〉における儀礼 |
|----------|--|---|
| 儀礼執行者 | 男性祭司 | 女性シャマン (圧倒的多数) 男性祭司 (降神して司祭) |
| 降神 | しない | する |
| 儀礼執行者の類型 | priest (祭司) | shaman (シャマン) shaman-priest (シャマン祭司) |
| 唱え言 | 経文 (テキストあり) の読誦 漢字知識が必要 | 歌 (テキストなし) 漢字知識は必ずしも必要なし |
| 言語 | <i>Tsie waa</i> (「広東語」) <i>Khaeq waa</i> 漢語雲南方言 <i>Mien waa</i> ミエン語 | <i>Dzung waa</i> 文語 <i>Mien waa</i> ミエン語 |
| 祭神 | 〈大堂画〉の神々 (道教) 〈玉帝〉 経文に登場する神々 祖先 師父 〈盤王〉・〈唐王〉 像なし | 〈盤王〉・〈唐王〉 廟に像あり <div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="margin-right: 10px;"> 〈老君〉 〈郎老〉 〈伏羲姉妹〉 〈七姐〉 〈太白先生〉 </div> <div style="font-size: 2em; margin-right: 10px;">}</div> <div> 口承伝承における神々 (経文には登場しない) </div> </div> |

るようで、1人の女性シャマンは1ヶ月の大半を村外での儀礼に費やし、時には2、3ヶ月家を空けることもあるという。実際、彼女に会えたのは正月と七月の儀礼のときだけであった。また、パヤオ（Phayao）県チエンカム郡のPY村でもHCP村の他の女性シャマンを呼んで儀礼を行ってもらっていたのを観察した。このように、単に〈廟〉における儀礼だけでなく、村外における一般的な儀礼の需要（表1C列の儀礼）にも応えているのである。

これは、男性祭司の減少に対応した需要であろう。実際に、男性祭司は後継者不足である。これは学校教育の普及により、逆に漢字を学ぶ者が激減していることや、出稼ぎの増加に見られる社会的流動性などが影響していると思われる。女性シャマンの一般的な儀礼への進出はそうした状態への対応でもある。いわば男性祭司の不足を補う役割を果たしている。もっとも、現在はその数は限られており、今後いかなる展開となるかは注視しておかねばならない。表2に従来の儀礼と〈廟〉における儀礼との対比を示したが、新たな儀礼は従来の儀礼になかった特徴を持ち、その点で両者は補足的関係にある。

4. 文語と歌唱法

1) 文語 *dzung nyei waa* または *dzung waa*

ユーミエンは言語使用が複雑である。通常の日常会話で用いられるミエン語のほかに、儀礼の司祭では雲南漢語（*khaeq waa*）と広東語（*kek waa* あるいは *tsie waa*）が用いられる。さらには、歌唱には、日常言語の語彙と異なる歌唱用の語彙体系がある。この歌唱用の語のことをミエン語でヅウン・ニエイ・ワー *dzung nyei waa*（あるいは短くヅウン・ワー *dzung waa*）という。「歌の言葉」の意味である。

1960年代からユーミエンの言語と歌について調査研究を続けてきたH.C. パーネル（Purnell）は日常会話で用いられるミエン語（*mien waa*）を vernacular language 「日常口語」、歌で用いられる言語（*dzung waa*）を literary language 「口頭文学語」、特定の儀礼で用いられるツィア・ワー *tsie waa* という儀礼用言語を ritual language 「宗教礼儀語」と記述している [Purnell 1991:373, 珀内尔 1988:145. 「」で示したのは中国語版の表記である]。

ユーミエンは漢人との接触が長く、漢民族の文化の影響が大きい。語彙体系にも漢語からの借用語は多くある。しかしながら、詩文で用いる漢語語彙と、儀礼で用いる漢語語彙の読み方は些か異なっている。これは、それぞれの語彙体系が漢語の影響を受けた時代が異なり、異なった発音の漢語語彙を受容したためと考えられる。恰も日本語において、日常用いる漢語語彙の読み方には漢音が多いのに対し、仏教で用いる語彙は呉音が多いのと似ている。

本稿の焦点となるヅウン・ニエイ・ワーは、即興で唱われる場合もあるものの、文字に書かれることが多く、実際に「歌を書く」*fi dzung* という言い方もある。ミエン口語の場合は語彙に対して相当する漢字が見いだせないことがしばしばあるが、ヅウン・ニエイ・ワーの場合は相当する漢字が決まっており、書くことを前提とした語彙体系である。そのため、「口頭文学語」という訳語は不適切であり、寧ろ文語とした方が良い。本稿では日常会話で用いられるミエン語を口語、詩文に用いられるミエン語を文語、儀礼に用いられるツィア・ワーを儀礼語とする。ひとつ注記しておかなければならないことは、ツィア・ワーは儀礼でも表のA列とB列の儀礼にのみ使い、C列の儀礼には、ミエン口語か雲南漢語が用いられることである。

2) 歌唱法

ユーミエンの「歌を唱う」「歌を読む」にはいくつかのカテゴリーがあり、その区分は少々複雑である。基本的なスタイルの違いとして、パーオ・ヅウン、ツェン・ヅウン、トツ・ヅウン、コン・ヅウンの4種がある。

(1) パーオ・ヅウン *paau dzung*

IMED [Purnell (compl. & ed.) 2013] では「baaux nzung 伝統的な歌を高度に装飾的な発声スタイルで唱う。(2) 一般に歌を唱うこと。[文化的説明] パーオ・スタイルでは、歌の単位は対句である。対句は1行14字が2行で構成される。この対句は完結した内容の歌詞であり、ひとつの『歌』(一首の歌)と言われる」[IMED:611]と説明されている。

しかし、筆者の旧来の調査地(PY村とNG村落)で聞き取った歌い方の説明は少し異なる。パーオ・ヅウンについて聞き取りによって補足すると、パーオ・ヅウンは、狭義では韻律に従った歌詞を長い節(*chie daau*)をつけて唱う歌唱法である。本来的には男女一対となり即興で唱うが、1人で唱うときにも左記の歌い方をする場合はパーオ・ヅウンという。パーオ・ヅウンで用いられるのは、もっぱら文語(*dzung nyei waa*)である。IMEDには「14字」とあるが、厳密に言うと、7字の歌詞が4連28字で一組の歌となる。7字句をミエン語でイエット・ガーン *yet gaan* あるいはイエット・チョウ・ワー *yet ciou waa* という。イエットは1の意味である。7字句が4句すなわち4ガーン28字句をイエット・ティウ・ヅウン *yet tiu dzung* という。訳すと「一連の歌」である。漢詩で言えば、「七言詩」である。これが歌の単位となる。パーオ・ヅウンは本来、男女一対で歌を掛け合うのであるが、そのときにこのイエット・ティウ・ヅウンごとに唱い合うという。

唱い方を文字で表現するのは難しいが、1字ごとに長い節をつけて唱い、比較的高音になる。また、パーオ・ヅウンの唱い方の特徴にファー *faa* とツエイ *tsei* がある。パーオ・ヅウンでは、1行の前半の7字を1度唱い、その後後半の下の句の7字を2度唱う。IMEDによると、「パーオ・ヅウンにおいては、ファーは繰り返される部分の始まりを指し、ツエイは繰り返される下の句が終わったことを示す」[IMED:161]という。ファーとツエイについては、これと異なる説明をPY村とNG村の複数の祭司から聞いた。それによると、ツエイは、1行の前半の3字目あるいは4字目に「ツエイ」という拍子を取る句を差し挟むのである。いずれにしても、「パーオ・ヅウンは、ファーとツエイを伴うが、トツ・ヅウンやコン・ヅウンはファーもツエイも伴わない」という。

(2) ツェン・ヅウン *tshen dzung*

IMEDでは、「cenh nzung 婚礼で乾杯を促すときに唱う歌」[IMED:611]という。左記に述べたように、結婚式の宴席で言祝ぎのために唱われる。IMEDでは婚礼に限定しているが、PY村の祭司の説明では、新年の〈拜年〉という儀礼のときにも唱われる。

(3) トツ・ヅウン *toq dzung*

IMEDには「doqc nzung 軽快な装飾を伴った『読む』スタイルで歌を唱う。[文化的説明] 歌を読むスタイルは、比較的装飾のない平板なメロディーを用いる。この読誦形式は、主に恋愛歌や労働歌、哀歌などのような俗な歌に用いられる」[IMED:612]とある。トツ *toq* は「読む」の意味で、漢字を当てれば「読」であり、「本を読む」は *toq sou* (〈読書〉)となる。祭司の説明を加えると、用いる言語は文語であり、パーオ・ヅウンと比べて節が短い(*chie nang*)。同じ歌詞をパーオ・ヅウンで唱うことも、トツ・ヅウンで唱うこともできる。

(4) コン・ヅウン *koang dzung*

IMEDでは、「gorngv nzung (1) 軽快な抑揚を伴ってテキストを唱う、あるいは読み上げる。(2) 文語でなく且つ韻律規則にも従っていない歌を唱う」[IMED:612]という。コン *koang* は一

般に「話す」を意味する動詞である。

PY村のある祭司の説明では、コン・ヅウンは節を伴うものと節を伴わないものがあり、節を伴わない場合は文章を読み上げるだけであるが、歌の節を付けて読むとコン・ヅウンとなるという。しかし、他の祭司の話では、文語の歌詞を短い節を付けて（ファーもツェイも伴わず）唱うのがコン・ヅウンであるという。この祭司の話ではコン・ヅウンとトツ・ヅウンとの違いが明瞭ではなかった。筆者が聞いた祭司たちの説明を筆者なりにまとめると、以下のようになる。(I)元のテキストが韻律と定型に従った歌詞 (*dzung*) であるとき、これを短い節を付けて唱うことをコン・ヅウンという。(II)同様の歌詞を節を付けずに読み上げることもコン・ヅウンという。(III)歌詞の定型に従っていない文章を節を付けて唱う場合もこれをコン・ヅウンと称する。(I)はほぼトツ・ヅウンと同じである。このコン・ヅウンとトツ・ヅウンとの区別については、文語の歌詞を軽い節を付けて即興で唱うのがコン・ヅウンで、予め作成された文語の歌詞のテキストを軽い節を付けて唱うのがトツ・ヅウンであると考えられるが、これはさらなる精査が必要である。

上に記したHCP村の〈拜盤王〉儀礼の音声入り映像をPY村とNG村の祭司に見せたところ、女性シャマンが歌を唱って儀礼を司祭している場面の多くは、(I)のコン・ヅウンであるとの判断であった。女性シャマンの歌は儀礼の定型句か、あるいは即興に唱われるものである。多くの歌詞は文語であり、節回しはパーオ・ヅウンのようなファーが入っていない簡略な節回しが多かった。パーオ・ヅウンと見なされる歌もあったが、大半はコン・ヅウンであると判断された。

5. 女性と歌謡

上記のように、女性の儀礼参加の方途としての〈歌〉は、複雑な形式を伴っている。儀礼のときに唱う歌は多くがコン・ヅウンである。このように儀礼を読経ではなく歌唱によって司祭するのは、新たな儀礼形態である。従来の儀礼では、男性祭司が経文を読誦あるいは暗誦する。その際には読誦特有の抑揚はあるが、歌唱のメロディは使わない。一方、女性シャマンの儀礼では、経文の読誦は見られない。実際、漢字を読める女性はほとんどいない。簡単な儀礼を行うには、経文を暗誦すれば良いが、複雑な儀礼となると漢字で書かれた経文を読めなくてはならない。従来は漢字を学ぶのは男性だけであり、女性は漢字を習わず、読めなかった。漢字の読誦能力は、女性が祭祀活動に参入できない障壁となっていた。経文ではなく〈歌謡〉による儀礼司祭という形は、このジェンダーの障壁を回避する道を開いた。

女性シャマンたちが唱う歌が果たして神降によるものか、あるいは素面でも唱えるのかは、実は定かではない。観察していると、トランスに入らなくても歌を唱える人もいるように思える。しかし、歌では文語による複雑な様式の歌詞を操り、節を付けなくてはならない。この点で、日常の口語会話とは全く異なっている。普段は歌を唱えないとされる人が神降すると歌を唱って儀礼を司祭する。すなわち、歌唱による儀礼司祭は神降の証でもあり、それ故にこそ、その儀礼が神が行っているものとして、あるいは神の指示によって行っているものとして正当化されるのである。実際には、降神して無言で儀礼司祭する女性シャマンもいるが、それはHCP村の26名中で2名だけである。圧倒的多数の女性シャマンは歌によって儀礼を司祭しており、それがクライアントに受け入れられているのである。

また、従来の儀礼は先に述べた男性中心主義があったが、HCP村およびHCL村の〈廟〉における祭祀活動においては、参加者の数においても、個々人の熱意に関しても、女性が圧倒的に多く参加している。それも女性自身の自発的な参加の面が強いのである。

6. おわりに

以上、タイ北部のユーミエン社会で生じている〈廟〉建設と女性シャマンの出現という、新たな宗教現象の一端を報告した。本稿で述べたことをまとめると以下ようになる。

(1) これまで移住生活を続けてきたユーミエンの定住化に伴って「初めての」固定的祭祀施設が建設された。ユーミエン全体に関して言えば中国国内に〈廟〉があるが、タイに住むユーミエンにとっては〈廟〉を作るのは初めての経験である。

(2) 儀礼を司祭する者として女性シャマンが出現した。単に儀礼の場に参加するだけでなく、女性が儀礼司祭者となっているのは、従来のユーミエン社会には見られない現象である。

(3) 女性シャマンに神降する神は、〈盤王〉〈唐王〉以外は主に口承伝承で伝えられてきた神々であり、従来の儀礼の経文による祭祀対象の神とは異なる。

(4) 女性シャマンは〈歌〉によって儀礼を司祭している。これは、従来の儀礼が男性祭司による読経ないし経文暗誦であったのとは大きく異なり、ジェンダーの壁を越えて女性シャマンが儀礼を司祭する道を開いた。

(5) ユーミエンの歌は日常会話で使う口語と異なる文語を用い、歌唱法も複雑である。その歌唱法のうちのコン・ゾウンが、女性シャマンが多く用いている歌唱法であった。

(6) 女性シャマンが司祭する儀礼は、個別クライアントの需要に応じた治療儀礼、厄祓い儀礼、開運儀礼がもっぱらである。

(7) 〈廟〉の建設、女性シャマンの登場、口承伝承による祭神、歌による儀礼司祭は、従来の儀礼には見られなかった側面であり、その点で従来の男性中心主義的な儀礼群と補足的関係にある。

これらの特徴以外にも、本稿で触れられなかった特徴があるが、この現象は現在進行形で変化しており、本稿も変化の途上の中間報告にとどまる。今後さらに追究を進めてゆきたい。

付記

本稿は、国際常民文化研究機構の共同研究の他に以下の科研費による調査研究の成果の一部である。科学研究費補助金基盤研究 (B) (海外学術調査) 課題番号 22401046-1 (研究代表者: 塚田誠之)、科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号 23520982 (研究代表者: 吉野晃)、科学研究費補助金基盤研究 (A) 課題番号 22251003 (研究代表者: 片岡樹)。

注

(1) ミエン語の表記は、IMED が標準となるが、その表記法は IPA に対応しているとはいえ、IPA の表記とは懸隔がある。中国のピンインに倣ったためか、たとえば両唇破裂音の場合、無声不帯気子音 [p] を b、無声帯気子音 [p^h] を p、有声音 [b] を mb で示すといった具合である。有声音は異音で [mb] となることがあっても、音素としては /b/ であり鼻音の有声音の前に付くわけではない。この点で、IPA を前提として読むには違和感があるため、本稿ではできるだけ IPA に近い表記にした。原則としてアルファベットは同形の IPA に対応する。しかし、印刷上の便を考えて、下記の変則を設ける。また、ミエン語には 6 声調があるが、本稿では表記を省略した。IMED の表記に近づけたため、従来筆者が用いてきた表記に若干の修正を加えた。

タイ語の表記は、概ね上記のミエン語の表記と同様である。ミエン語表記と異なる点: 母音には長短の弁別があるのでコロン (:) で長音を表す。たとえば a:=a:/ である。ミエン語にない母音は次のように表記する。ue= /u:/。声門閉鎖はアポストロフィ (') で示す。音節末子音: -y=/j/、-w = /w/。

例外として、固有名詞の表記では長音符を外す。地名の表記は、上記の原則にかかわらず、タイの道路標識な

表3 子音

| | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|----|----|---|---|----|----|----|----|----|-----|-----|---|---|--------------------------|
| IPA | ʈ | ɖ | c | ɟ | ç | ŋ | ɲ | m | n | ɳ | ɽ | j | ʔ | h (帯気) |
| 本稿の表記 | ts | dz | c | j | hy | ng | ny | hm | hn | hng | hny | y | q | h (p, t, ts, c, k の後) |

表4 母音

| | | | | | | | | | |
|-------|---|----|----|----|----|----|----|----|----|
| IPA | a | a: | ɛ | ɔ | ə | əu | ɔi | uə | iə |
| 本稿の表記 | a | aa | ae | oa | oe | ou | oi | uo | ie |

どで採用されている方式に従う。たとえばパヤオ県の「パヤオ」は上記の原則では Phayaw となるが、一般には Phayao の方が通用しているの、後者の書き方に従う。ナーン県の「ナーン」も上記原則では Na:n であるが、通用している Nan の表記を採用する。

- (2) 本稿では、「神を降ろす」を「降神」、「神が降りる」「神が降りた」を「神降」と記述する。また、「祭司」はプリースト型の宗教職能者を示す名詞として用い、「司祭」は「司祭する」という儀礼執行行為を表す動詞の語幹として用いる。

参考文献

- IMED → Purnell (compl. & ed.) 2013.
- Krom Phatthana:sangkhom lae' Sawatdika:n 2002 *Thamniap chumchon bon phue:nti:su:ng 20 cangwat nay Prathe:t Thay P.S.2545*. Krom Phatthana:sangkhom lae' Sawatdika:n, Krasuang ka:nphatthana: lae' Khwa:mmanhong khoang manut. (Highland communities within 20 provinces of Thailand, 2002. タイ語, 社会開発福祉局『2002年タイ王国20県内山地村落目録』社会開発人間安全省社会開発福祉局)
- Mongkhon Chantrabumrourng 2006 Reproduction of Yao culture: a case study of Pien Hung shrine at Ban Huey Chang Lod in northern Thailand. 塚田誠之(編)『中国・東南アジア大陸部の国境地域における諸民族文化の動態』(国立民族学博物館調査報告 63), pp. 249-266.
- 珀内尔 (Purnell, H.C.) 1988 「“优勉” 瑶民間歌謡的韵律結構」 喬健/謝劍/胡起望(編)『瑤族研究論文集』北京: 民族出版社, pp. 143-170.
- Purnell, H. C. 1991 The metrical structure of Yiu Mien secular songs. In Lemoine, J./Chiao Chien (eds.) *The Yao of south China: Recent international studies*. Paris: Pangu, Editions de l'A.F.E.Y., pp.369-394.
- Purnell, H. C. 1998 Putting it all together: Components of a secular song in Iu Mien. In Chelliah, S. / de Reuse, W. (eds.) *Papers from the Fifth Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society 1995*, Tempe, AZ: Arizona State University, pp. 277-302.
- Purnell, H. C. 2002 Steps toward standardization of a minority orthography: An update on Mien (Yao). In Macken, M. (ed.) *Papers from the Tenth Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society 2000*, Tempe, AZ: Arizona State University, pp.
- Purnell, H. C. (compl. & ed.) 2012 *An Iu-Mienh-English Dictionary with Cultural Notes*. Chiang Mai: Silkworm Books.
- 吉野 晃 2013 「廟と女性シャーマン—タイ北部、ユーミエン（ヤオ）の新たな宗教現象に関する調査の中間報告—」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅱ』64, pp. 115-123.